

## Interdisciplinary dentistry 矯正専門開業 35 年の経験から

医療の質や程度は社会的背景と深く関わっているので、社会における臨床の形のあり方は学術的な面のみによって論じることができない。したがって **Interdisciplinary dentistry** を取り上げるに当たっては、二つの局面からの考察が必要である。一つは学術的な面、もう一つは医療を取り巻く社会的背景である。

現在の日本はあらゆる面で改革が必要となっており、新しい秩序や体制への移行期にあつて混乱を伴った模索が始まっている。日本の歯科界にあつてもこの **30** 年間に歯科医の数は **2** 倍以上の **10** 万人近くまで増え、少子化傾向と相まって確実に歯科医過剰となり、歯科医業のあり方についても新たな仕組みの導入が必要である。そのような時代にあつて、**Interdisciplinary dentistry** は社会のニーズに沿った、また歯科医業の信頼と充実に向けた意味ある診療体制であると考えている。

歯科医学の各種の分野の知識や技術を組み合わせて、より包括的な見地から臨床展開を行う **Comprehensive dentistry** (包括歯科医療) という用語が先端歯科医療の形として好んで用いられたことがあつたが、現在ではインプラントをはじめ骨の再生など、各歯科領域の進歩から臨床の形が変化し、個々の歯という単位を超えて一つの咀嚼器官全体として管理することが歯科医療の常識となりつつある。そのような時代の流れの中にあつて、高度に細分化した各種の医療を最大限に活用する方法として **Interdisciplinary dentistry** がある。**Interdisciplinary dentistry** とはいわば連携歯科医療といえるもので、歯科医学の体系の中で各領域の専門医を含めて相互に協力し合い、より高度な視野や技術で一つの症例を総合的に治療していくことを意味している。したがって **Interdisciplinary dentistry** は **Comprehensive dentistry** を行うための方法論であるが、一人の術者が全ての領域をこなして **Comprehensive dentistry** と表現されることとは本質的に意味を異にする。

**Interdisciplinary dentistry** が成立するための条件としては、各領域にいわゆる専門的知識と技術、経験を兼ね備えた専門医が必要である。歯科という領域の中でどのような専門医が必要なかは議論されるべきだが、専門とは「そのことを担当するだけで他の部門に従事しないこと」である。すなわち特定の領域における知識や技術に長けた臨床経験の豊富な、歯科医療の中の限局した領域を仕事とする特化した歯科医といえる。しかし、我が国ですすであるいくつかの専門医制度は複数の専門医の資格を取得できる制度であることから、専門という意味が曖昧なものとなり、ややもすると専門医という資格が単に歯科医の能力の格付けを意味する道具とされようとしている。専門医という立場は歯科の中で特定領域を専門として臨床に従事するという診療姿勢と資質を意味するもので、歯科医としての格付けを表すものではない。専門医が専門医としての能力を発揮するには、専門医として従事できる仕事場があり、習得した専門的技能を社会に還元できるような社会のシステムが必要である。**Interdisciplinary dentistry** が実際に広く社会に展開されるようになるためには、まずは専門医の意味を深く見据えた専門医制度と専門医の育成が必要だろう。

今回は、長年矯正専門で開業を行ってきた経験を通して、我が国における単科開業医の立場の変遷、ならびに **Interdisciplinary dentistry** のあるべき姿を考え、次いで臨床面から、矯正医として「何かでき、何ができないか」をお話しさせていただきたい。

.....

◎与五沢 文夫 (よごさわ ふみお) 先生  
よごさわ歯科矯正 院長